あさ 2

2017

朴魯植 俳句集

虚子選 ホトトギス抄
カリタゴ抄

大正十二年

川沿の町幅廣し夏柳

大正十三年

藻の上を流る藻屑や藻刈舟

貰ひ兒の丸々肥えて天瓜粉

不斷着に替へはや菊におほしけり

外出や暖爐によりし程もなく

一笑して事は濟みたる火鉢かな

大正十四年

降るにつれ止むにつれ雪のけはひかな

杣やめてもとの漁師や春の海

郷に入る田植戻りの後ろより

舷や屆く花藻に手きのべて

伸びし手の相合ふところ花藻かな

蚊帳吊るや月の淺流まのあたり

大正十五年

時經ちて怒り納まる火鉢かな

ひるがへる蓮葉や花を包むかに

戸しむるや噛まれし萩に開け戻し

菊はさて嵯峨の莊とも申さばや

月の出や漕ぎ賑はへる一と岬

落葉掻く背の兒眠れば ひたすらに

高島茂書写

あを

二　月

東京　佐藤　喜孝

中川句寿夫さんへ　一句

弔電が雪で届けられぬといふ報せ
ほほゑめる天皇夫婦林檎園
わが妻の木の葉髪とはちがふ髪
蠟石の丸の中から出ない冬
落蟬の地を打ってゐる袂かな

東京　森　なほ子

木枯へ

カレンダー九月のままに冬日差
電線にかかる三日月芭蕉の忌
年寄に一声かけて木枯へ
冬晴や釣舟の中よく乾き
河番付橋番付や浮寝鳥

東京　赤座　典子

クリスマス

ベランダに林檎の芯待つ冬の鳥
鋤焼には糸蒟蒻と言募る
鈍色の氷下魚をそっと炙りをり
幼子の歩いてみせるクリスマス
きりたんぽ鍋恒例の年忘

埼玉　秋川　泉

富士を観る

漱石忌深夜テレビの虞美人草
厳めしく外郎売りの冬羽織
鳴り渡る古寺の梵鐘冬紅葉
冬枯れの野を包み込む富士の山
農夫らと焚火を囲む白い犬

東京　石森　理和

雑詠

うす氷溶けずに今朝の厚氷
厚氷をさなが乗って大はしゃぎ
声弾む氷を全部割ったよと
青々と川は流るる枯野原
群青の真冬の海に日の跳ねる

山梨　井上　石動

雑詠

霜の夜の棒線に消す名のひとつ
諏訪の湖凍つるか河合惣五郎
年の夜のテレビは吾の居場所なく
見下ろせば古府中甲府除夜の鐘
寒月は小舟か星は船頭か

愛知　王岩

雑詠

大仏の微笑まれたる紅葉かな
木漏れ日の径を飾る紅葉かな
昼月や大空青く晴れ渡る
星屑の瞬く空や冬銀河
大空の鷹にも勝る男かな
祝張勝大兄還暦

埼玉　大日向幸江

赤ん坊

病院の樅の樹灯るイルミネーション
駅前のけやき広場に鵜眠る
テラテラとグランドピアノ冬埃
焼芋や手の平に乗る福の神
カピパラの柚子のお風呂に揺られをり

千葉　黒澤　佳子

七五三

歳末や歯医者で貰ふ福引券
拝みたくなるよな夕日暮の秋
年忘れ銀座に行こか歌舞伎座に
火の用心町内会や子の声も
焼芋を割れば栗色バター溶け

東京　七郎衛門吉保

初雪

トランプと十一月の初雪と
初雪に慌て出揃ふシャベルかな
初雪の今朝の水沫やジャリジャリジャリ
冬ざるる波の浮き寝のカジノ法
吸殻を探す火鉢や父の影

東京　篠田　純子

初春

宝絵を敷きがさごそと寝返りす
里神楽大黒天の笑皺
里神楽とんと笑はぬ毘沙門天
面の頬少し剥げゐる里神楽
どれ何処にほらそれ其処に笹鳴きす

石川　定梶じょう

内緒ばなし

みなマスクして信号の停止線
鰤起し塀のトタンが波うてる
開戦日烏賊火一点鋭くともる
ひと込みの中のひとりの冬銀河
冬ぬくし内緒へどちらの耳貸さう

埼玉　須賀　敏子

冬の日

一月八日白菜を漬け日の暮るる
沈下橋元に戻りて冬麗
高麗川に沈みつつ行く冬紅葉
有り余る落葉蹴散らし三頭山
冬至迄南瓜二階に待機させ

埼玉　竹内　弘子

川

涸川を越す一人欠くるなし
冬銀河ちひさくちひさくちひさくなれ
雪片の降り込みざまに川流る
顔二つ川中島の飾り凧
海に出る川の一念雪解風

東京　田中　藤穂

冬の雲

耳を病み人遠くなる枯葉道
回復期枯葉の窓に爪を塗る
火をこぼすポインセチアを身ほとりに
要らぬもの捨てて寒さのつのる午後
綻びを直すに時間冬の雲

石川　中川句寿夫

冬帽子

木の実雨板戸に心張棒をして
尼様に家族がありてむかご干す
素手素足遊ばせ風船かづらかな
神留守の急がぬ返事書いてゐる
何も悔やまぬ今日の冬帽子（絶詠）

三重　長崎　桂子

枯

歩を緩め香りは楽し金木犀
小春日やなべて安らけき日暮
枯枝伐る空と歩道の広きかな
枯葉捨つ四季の移りは見事なり
帰り道垣に寄り添ふ枯芙蓉

前月抄

柿吸うて若返ること拒みけり　佐藤喜孝

落ち葉掃く晴れ渡りぬて快き　長崎桂子

木犀の音立てて散るめうが畑　森なほ子

住み馴れし街初雪に輝けり　赤座典子

ハロウィンにデビットボウイもマイケルも　秋川　泉

これからは満腹は駄目炬燵かな　石森和子

珈琲を飲めば枯葉の音の中　井上石動

長江の逆巻く涛や明け易し　王　岩

小春日の象の足首緩やかに　大日向幸江

電燈を替へる息子や煤払ひ　黒澤佳子

暮れ遅しケンケンパーのひびく路　佐藤恭子

長き夜の奄美六調こころうた　七郎衛門吉保

銀ヤンマ逆噴射して着陸す　篠田純子

声あげてわが身確かむ霧ぶすま　定梶じょう

診断は様子見ませう石蕗の花　須賀敏子

神無月連れ添ふものに電子辞書　田中藤穂

神の留守爪を切るため指ぬくめ　中川句寿夫

喜孝抄

一月作品より

秋川泉・森なほ子・佐藤喜孝

寸前かも途中なのかも寒卵　佐藤喜孝

読み手によって様々に解釈できるでしょう。私は、時々人生を河のように思います。先には底なしの滝。今が寸前なのかまだ途中なのかは誰も分かりません。しょうがないから、とりあえず寒卵で栄養つけますか。まだ途中なのかも知れないのだから。（なほ子）

落ち葉掃く晴れ渡りゐて快き　長崎桂子

一読、秋の青空に染まりそう。桂子さんは一心に落ち葉を掃いておられます。何の屈託もなく穏やかな一日。快い一句です。（なほ子）

木犀の音立てて散るめうが畑　森なほ子

微細な韻き、目立たぬ景である。しかし見るこころ、聞くこころがあれば滋味溢れる光景になる。漢字と違ふひらがなの効用を知ってゐる作者である。（喜孝）

ハロウインにデビットボウイもマイケルも　秋川泉

ほとんど片仮名でそれが無理なく五七五になっています。どこか似通ったボウイとマイケルのデフォルメされたマスクをつけた人でしょうか、それとも？（なほ子）

これからは満腹は駄目炬燵かな　石森理和

「これからは」にはある決意を感じる。いままでは好きなものを好きなだけ頂ける体調であったが、何らか一念発起をする機会があったのだらう。「炬

燵かな」には作者の年代にともなふ淋しげな心もちがにじみ出てゐる。（喜孝）

客声の古寺門前や吊るし柿　井上　不動

いつもしんとしている古寺。今日は門のあたりに珍しく人声が。この吊るし柿はどこに干されているのでしょう？日当たりのよい住職の部屋の縁側？静かな寺の様子を色々に思い浮かべる楽しさがあります。住職の風貌までも。（なほ子）

珈琲を飲めば枯葉の音の中　井上石動

接続助詞の「ば」は、俳句では遣ひにくい語、とは作者すでにご存知。作者の感覚に同化、いや少しでも近づかうと何度も読んでみると、分かったやうな気になった。こんな句の楽しみ方もあることを知った。（喜孝）

艶めくや睡余の佳麗牡丹花　王　岩

見慣れない漢語ですが辞書にちゃんとありました。眠りから覚めたばかりの美女のように艶めかしいことよ、牡丹の花は。と和訳？してみると、やはり、この漢語が豪奢な牡丹の花に相応しいのだと思うのでした。（なほ子）

古里は秋刀魚は干物で食べる物　大日向幸江

幸江さんの古里は近畿地方でしょうか。私も初めて棒状のさんまの干物を見たときはびっくりしました。産卵を終えて南下したさんまは油が抜けて、干物にすると旨味が凝縮して美味でした！（なほ子）

小春日の象の足首緩やかに　大日向幸江

象は巨軀に似合はぬ五体の繊細さには驚く。「足首緩やかに」にそのことが伝はる。小春日の動物園

の象の動くさまが浮かんでくる。「象」を「像」と誤植してしまった。情けない。ご寛恕を。（喜孝）

秋桜を見るたび意欲もらひけり　黒澤佳子

広々とした野に一面の秋桜。作者のお好きな可憐な花。そして強風に吹かれても折れる事もなく風の通るままにしている姿に心ひかれて作者も元気になるのですね。（泉）

電燈を替へる息子や煤払ひ　黒澤佳子

年をとると高いところでの作業が苦手になる。年を取らなくとも身長の低い者も同様。踏み台を使っての電球取替もその一つ。その電球取替を息子がしてゐる。その作業を頼もしげに見上げてゐる母親がゐる。季語がよく働いてゐる。（喜孝）

暮古月またも齢を重ぬなり　佐藤恭子

暮古月という語を初めて見ました。この言葉が句に味わいと重みを与えています。「一月」では当たり前の事になってしまいますよね。スープが調味料とスパイスで味が決まるように。（なほ子）

奄美人心の柄の秋袷　七郎衛門吉保

奄美大島への旅をした作者は、そこで美しい女性に出逢われた。その方の心模様が柄になった大島紬を召されていたのでしょう旅情あふれる作者の思いが伝わりました。（泉）

木枯や運河の角に水脈あたる　篠田純子

水量豊かな運河の角に勢いよく水がぶつかっている、という写生句。「木枯」という季語によって臨場感とやって来た冬将軍の荒々しさを感じさせます。（なほ子）

銀ヤンマ逆噴射して着陸す　篠田純子

大型蜻蛉のヤンマ。逢ふ機会が少なくなった。トンボはめったに地面に止まらない。先の尖ったところや細いところに止まる。飛んで来てピタッと止まる。逆噴射でもしてゐるのかと作者はおもった。童心そのものの作者である。（喜孝）

敷石の剥がれたところ霜柱　定梶じょう

写実主義の油絵を見るようです。華やかでも美しくもないところを凝視しています。色彩は地味ですが、この絵は見飽きない魅力があります。

ところで霜柱が敷石を持ち上げたわけではありませんよね？（なほ子）

声あげてわが身確かむ霧ぶすま　定梶じょう

深い霧に取り巻かれると、不安になる。目隠しをされたも同然。わたしも何処かの山路で体験をしたが、「声あげてわが身確かむ」が霧の深さと恐ろしさをからだを持って表現された。（喜孝）

くまもんが案山子になって彩の国　須賀敏子

熊本のくまもんが案山子になって埼玉にやってきた！高い空、たわわな稲穂、なんと楽しい田の風景でしょう！（泉）

診断は様子見ませう石蕗の花　須賀敏子

お医者さんが何でも分かるとは思ってゐないが、患者は安心したがってゐるもの。答が出ず少々不安になりつつ医者の門を出る。凛々しい石蕗の花に元気づけられながら。ふと聞き止めた会話を軸にその時の心の動きを上手に書き留めた。（喜孝）

神無月連れ添ふものに電子辞書　田中藤穂

作者は昭和のかおりいっぱいの御家に、来客は常にありますがおひとり住まい。テレビ・ラジオ・新聞など「はてな？」と思われたら、いつでもどこでも電子辞書。電子辞書を友として今日も「はてな」に感心、感動されています。（泉）

神の留守爪を切るため指ぬくめ　中川句寿夫

十一月の能登は東京より寒いだらう。凍えるまでとはゆかなくとも冷えてゐると指先での細かい作業が難しい。刃物を使ふとなればなほ更。作者はほかにも「あを」に

膝立し足の爪切る糸瓜かな

猫の爪切つても見たり神の留守

あたたかき十一月の爪を切る

がある。「爪を切る」ことの根底に「爪を切ることのさみしさ春の暮　竹内弘子」といふことがあるのかも知れぬ。（喜孝）

比来披見

ホトトギス　一月号

焼藷の出来不出来など言ふまじく　稲畑　汀子
寒鮒に剝がされてゆく湖面かな　稲畑廣太郎

沖　一月号

葉の裏に銀を湛へて朴落葉　能村　研三

雨月　一月号

冬晴れの淀青々と日を返す　大橋　晄

槐　一月号

人類のはびこる星を鳥渡る　高橋　将夫

馬酔木　一月号

夢にまだ父と会へざり虎落笛　徳田千鶴子

風土　一月号

ほきほきと子芋孫芋はづしけり　南　うみを

京鹿子　一月号

文塚の千の戀の字雪催ふ　鈴鹿　呂仁

六花　一月号

蓮根の穴の桃いろ屠蘇祝　山田　六甲

万象　一月号

早朝より秋一日の病院よ　大坪　景章
濡縁を濡らさず過ぐる初時雨　内海　良太

春燈　一月号

石仏の笑みつつましき小春かな　安立　公彦

鴫　一月号

草紅葉卵の自動販売機　高橋　道子

末黒野　一月号

島の灯の明るさましぬ雁渡り　小川　玉泉
山襞のあれば忽ち霧の襞　松本三千夫

雲の峰　一月号

園児みな口を大きくクリスマス　朝妻　力

萱　一月号

透き通る秋蚕のやうに臥されける　木村　嘉男
冬木たたくわが身をたたく思ひにて　亀田虎童子
冷ややかや早目に届く夕刊も　小島　良子

澪　一月号

冷まじや桜切株朱の走り　松林　尚志
宵闇のことに甘蔗の闇深し　藤田　宏

集　一月号

父の日の家族のかたち垣根越し　大山　夏子

こだま　十二月号

シクラメンこぞり冬日を溢れしむ　松林　尚志

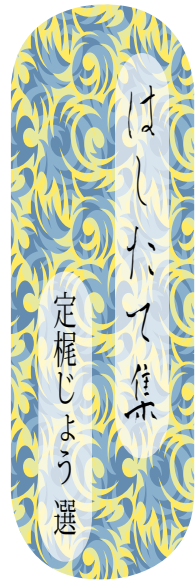
船団　百十号

父の日は木にぶらさがれ父も子も　坪内　稔典
父の日はカバにまず会え君たちよ

燭

夏山群がる底の底ひに湖湛へ　瀧　春一
夏天の藍爆裂火口かたぶける
黒揚羽泳ぎ出づるや爆裂火口

（喜孝）



田中藤穂

師走の身はげます緑茶濃く熱く
山茶花や喪中ハガキのまた一通
綿虫にわれもまぎれてゆくやうな
初氷張ると日記に今日終る
物故者に象の花子も年暮るる

綿虫にわれもまぎれてゆくやうな

秀句。中七以下のひらかな遣いも効果を上げてます。ただ、上五を「雪蛍」として休止を置いた方が、とは思うけれど私の好みにすぎない、かも。「雪蛍われもまぞれてゆくやうな」。

物故者に象の花子も年暮るる

象の「花子」を「物故者」として扱うこと反対しにくいのですが、でもやっぱり「物故者」に抵抗感。「年暮るる物故に象の花子の名」。

長崎桂子

新米を塩で結ぶや感謝のみ
凩や道端の芥とび跳ねる
散紅葉歩道の端の居場所かな
枯蔓や樋を螺旋に縋りつく
落葉踏む心身解す響かな

凩や道端の芥とび跳ねる

「凩」とありますので、坐五「とび跳ねる」はない方が。「凩や道のほとりのちり芥」。

散紅葉歩道の端の居場所かな

切り口上に「居場所かな」と措くよりも「道の端が居場所のやうに散紅葉」。

枯蔓や樋を螺旋に　縋りつく

今、これを書いている窓の外。樋ではありませんがベランダの屋根を支える柱にまさに山藤が左巻きに枯れきって纏っている。でも「縋りつく」とまでいわない方が。「枯蔓や樋を螺旋に縋りけり」。

落葉踏む心身解す響かな

「心身解す」が分りにくい。「落葉踏む時心身に響きけり」。

石森理和

牡丹雪横に流され十五階
待ちどおし病院食のいと旨し
初雪を病窓に見る佳い知らせ
気掛りは気掛りのまま年用意
極少の西瓜柄せり雀瓜

待ちどおし病院食のいと旨し

無季の句ですが、無季が生きていない。私の先輩に当たる方に「ほんまかいな病院食に卵酒」があります。理和さん句は実感でしょうが、もっと紆曲があっていい。

初雪を病窓に見る佳い知らせ

この場合、「病窓」を強調したい。「病窓に初雪を見る佳い知らせ」。初雪を佳きことの徴とみたか退院を示唆するのか、ともかく「佳い知らせ」ですから「病窓」を強調しても宜しいわけです。

極少の西瓜柄せり雀瓜

「雀瓜」。西瓜の柄にかるのですね。知らなかった。珍しいのは「西瓜柄せり」とした処。並の人なら「西瓜柄なり」とするでしょうが、「せり」も面白い。

大日向幸江

参加者の白髪目立つ忘年会

柿賜ふ食べるに惜しき茜色
先生の扮するトナカイクリスマス
病院のロビーに置かる御供えの
柚子の湯に手足を伸ばす赤ん坊

参加者の白髪目立つ忘年会

忘年会に白髪が多かった、だけでは詩句にならない。「同級の白髪ばかり忘年会」。

病院のロビーに置かる御供えの

正統的には「病院のロビーに置かれ鏡餅」でしょうが、坐五を生かすとしたら「病院やロビーに置かるる御供えの」。

柚子の湯に手足を伸ばす赤ん坊

表現に工夫が欲しい。「手足を伸ばす」と直戴に言うよりも「手足ゆったり」「手足悠々」など、と。

秋川　泉

大楠の眞上にありし冬の月
水仙の香の中にある日曜日
対岸のビルの灯映す冬の川
帰ること忘れて見入る冬怒涛
冬浪や茫然自失日の暮るる

水仙の香の中にある日曜日

佳句。木下夕爾に「公園の冬木の瘤の日曜日」がありますが、夕爾句と違った宜しさ。

対岸のビルの灯映す冬の川

「映す」なら「映る」の方がいい。「対岸のビルの灯(ひとも)る冬の川」のように取り合わせにするのも一つの方法。

冬浪や茫然自失日の暮るる

日の暮れの大波は確かに怖く且つ壮大。海底に何かが起っているような。しかし前の句の「忘れて見入る」は説明ですし後の句の「荘然自失」は四字熟語をそのまま遣って工夫がないことになります。「冬

怒涛見てゐて自失日の暮れは」。

赤座典子

温泉に入らぬも贅白障子
めでたきものすべて集めて熊手かな
雪囲済みぬと宴に懸付けり
地下道に藁の香広ぐ銀売

温泉に入らぬも贅白障子

なるほど温泉に来て温泉を使わぬのも栄耀の一つである、と。ひとり残った部屋の白障子。

雪囲済みぬと宴に懸付けり

「駆付けり」。「駆け付きけり」ではない。「駆けつく」に「り」が付いたことばなのですが、この言い方は正しくありません。

古語文法の殆んどの言い方は、現代そのまま遣ってもいいようになってますが、助動詞「り」だけは間違って遣うのはまずい、恥ずかしい、ということになっています。

「り」は、「花咲けり」「字を書けり」「母に話せり」などと遣いますが、否定の「ない」を農続させた時「咲かない」「書かない」「話さない」等、活用語尾がア行になる時に「り」をつけても宜しい、ということになるのです。「駆付く」は「駆けつけない」ですからア行ではない。「食べり」とつかったら恥ずかしいのは「食べない」とした時「ア行」ではなく「エ行」だから「り」をつけてはいけない、ということなのです。いっぺんに身につくことむずかしいと思いますが、慣れることで必ず身につきます。

地下道に藁の香広ぐ銀売

佳句です。「藁の香広げ」とした方が余韻が出るかも。

七郎衛門吉保

糸ほどく両手ひろげる囲炉裏端
セーターのほどいた玉や猫の的
毛糸玉追ひ駆ける猫猟師の目

友うかべ宛先き天の賀状書く

糸ほどく両手ひろげる囲炉裏端

典子さんの時と同じように「両手をひろげ、」とした方が余韻が。

セーターのほどいた玉や猫の的
毛糸玉追ひ駆ける猫猟師の目

この二句の下五。いずれも比喩見立てといっていい。句が俗になりがち。芭蕉がのちにあれ程支持、師事されたのは見立てを否定したからでしょう。動く毛糸玉を追う猫の形容に「猟師の目」とするのは当たりまえに近い。飛躍した方が宜しいのです。あるいはリズムだけのことばを措くのもいい。「毛糸玉追ひ駆ける猫とっとの目」。「とつとの目」を是とできないかもしれません。その時は改めて考えてみて下さい。

友うかべ宛先き天の賀状書く

のっけに「友うかべ」、は全体を弱くします。「天国へ宛てて賀状や友のかほ」。

須賀敏子

雪富士の見えしホームへ途中下車
空 堀 川 水 あ る 処 初 氷
手にとればメキシコ産のセロリかな
「もう歳よ」なんて言い訳年の空

雪富士の見えしホームへ途中下車

散文の語序で書かれています。無論それでいいこともありますが、「途中下車したる雪富士見えにけり」。

空堀川水ある処初氷

「空堀川」は実在の名なのでしょうか。あるいは、空堀でありながら川の用もなしている、ということでしょうか。いずれにしても「水ある処」の措辞が凡のようで凡でない。あゝ、水があったんだ、と。

「もう歳よ」なんて言い訳年の空

「年の空」が成功しています。でも上五中七は川柳調。「年の空なんぞと言ふと「もう歳よ」」。

佐藤喜孝

凧や注射一本打つために
粉ぐすりもたまに出してよ冬の星
ゆきかへり銀河鐵道ヒョコ賣

凧や注射一本打つために

凧の中の医者通い。初心の勉強に最適の句です。賢明な初心者が読んだら確実に階段をいくつか上がれる。なるほど俳句はこれでいいんだ、と。

粉ぐすりもたまに出してよ冬の星

仕事終りに診察べ。近所のお医春さんは粉薬をださないな、と思いながら帰宅へ。「冬の星」と措くのが喜孝さん流。

ゆきかへり銀河鐵道ヒョコ売

「銀河鉄道の夜」については記憶が殆んどないのです。しかし喜孝さん、記憶のあるなしを句の読み手に求めてはいないと思う。だから「夜」とは言っていないし、「ゆきかへり」ですから出発地で商うひよこ売りをもってきた。この「ヒョコ売」が喜孝さん流の意外さ、飛躍なのです。意外さだけではない。駅前の「寅さん」を思いうかべてください。

子役

木槿垣子役気合の旅芝居　山荘　慶子
次ぎ次ぎと達者な子役松の花　赤座　典子

小山

山腹に小山のやうな昼寝熊　赤座　典子

小止み

蕎麦湯あつし雨小止みなきけはひ　竹内　弘子
砲台に雨小止みなき桜かな　竹内　弘子
雨小止み鐘の鳴るまで昼の虫　篠田　純子

越ゆ

屋上のクレーンを越ゆ入道雲　松本　米子
利根川の鉄橋越ゆる野蒜かな　竹内　弘子
立ちこぎの少年白雨の橋を越ゆ　篠田　純子
救急車春は野を越ゆ橋わたり　定梶じょう
月見草教会の鐘湖を越ゆ　渡邉　友七
四面道の渋滞を越ゆ紋白蝶　赤座　典子
踏切をわが越ゆ西日いよいよ大　定梶じょう

今宵

耳たてて虫の音探す今宵かな　鈴木多枝子
木の葉舞ふ金星今宵大きかり　赤座　典子
秋立つや今宵も二合米を研ぐ　斉藤　裕子
枯葉鳴る今宵のラジオここまでに　長崎　桂子
冬座敷今宵の客はふたり連れ　秋川　泉

五葉松

ほほえみを衆生に五葉松の花　長崎　桂子

紙縒

薯嵐母が紙縒の山くづる　吉弘　恭子
文机紙縒ならべて春の宵　芝宮須磨子
山眠る撚つては紙縒ならべけり　定梶じょう

五欲

五欲からうつかり一欲なくす夏　吉弘　恭子

怖い

人間が一番怖い胡蜂　東　亜未
をさな子の怖いと震へ兜指す　石森　理和
怖いことしてみたくなりダイビング　須賀　敏子
雷を怖がらぬ猫大欠伸　芝　尚子
幼子の蒲公英の絮怖がりて　山荘　慶子

小脇

雷を背に犬を小脇に人走る　赤座　典子
抱瓶を小脇に早足枯野道　吉弘　恭子

ご破算

算盤の合計ご破算青木の実　東　亜未

壊す・毀す

東京都庁壊れぬものか広島忌　堀内　一郎

古里の家取り壊す赤のまま　鈴木多枝子
バス停の壊れしベンチ牛蛙　田中　藤穂
家を壊す一部始終を白木槿　早崎　泰江
病むことを毀れるといふ濁り酒　竹内　弘子
仕舞屋の壊され消さる冬の町　東　亜　未
チューリップガラスのやうに毀れけり　芝　尚子
毀れもせず夏を迎へし蝉の殻　早崎　泰江
蜘蛛の囲を毀すはいつもこの辺り　芝　尚子
人生と言ふ毀れもの年はじまる　堀内　一郎
四月馬鹿重機の爪が壁毀ち　定梶じょう
霜柱壊したくなる高さかな　須賀　敏子
世にすねて花壇を壊す春愁ひ　長崎　桂子
木の実落ち毀れるやうに認知症　芝宮須磨子
家毀つ梅雨の日確と中天に　佐藤　喜孝
小さき巣の壊され下がる若葉雨　石森　理和
壺毀ち思ひ出なくす寒夜かな　山荘　慶子
空蝉は風毀るるまで祷る　田中　藤穂
輪蔵は壊れてをりぬ初紅葉　篠田　純子

声高

春塵や異国の人夫声高に　芝宮須磨子
水温み声高に人往きかへり　赤座　典子
濁り酒酌み交わす夜の声高に　森山のりこ
談笑の声高になる秋の昼　田中　藤穂
声高な携帯背より日短し　藤野　寿子
声高に安全を言ふ四月馬鹿　石森　理和

ざあざあ

火蛾打ちし掌をざあざあと水に打たす　田中　藤穂

サーカス

尺取虫サーカス蜘蛛はレース編む　東　亜　未
風邪に伏しサーカスを見たしと思ふ　竹内　弘子

犀

寝返るに時間のかかる冬の犀　堀内　一郎
かち烏犀の後瀬に羽いちまい　佐藤　恭子
犀星の庭石を踏む八重櫻　篠田　純子
正面の細面なる冬の犀　佐藤　喜孝
冬ぬくし小虫を払ふ犀の耳　竹内　弘子

歳（年齢）

鰯雲ええ天気やなと百貳歳　芝　尚子
百歳の秋不死男展草田男も春一も　堀内　一郎
百歳にまだ時間あり蝶の羽化　田中　藤穂
秋高し仁王立ちにぞ満一歳　東　亜　未
年始め九十五歳の葬りとて　堀内　一郎
春風や一歳の児に赤い靴　須賀　敏子
穀象や見せてさせての三歳児　石森　理和

あとがき

扉は高島茂書写の『朴魯植俳句集』。原典不詳。茂はよく句集など書き写した。五十三枚の唐紙箋に書かれてゐる。**「朴魯植は木浦に育ち木浦に住み生涯日本の地を踏むことはなかった。大正末年期より「ホトトギス」に投稿忽ち虚子にみとめられた。僅か十年程に七百餘句を遺し、昭和初期の朝鮮俳壇に大きな影響をあたえ朝鮮の人の同行者の指導にあたった。虚子は朴魯植を朝鮮の子規とあがめた。昭和八年五月十三日長逝行年三十七歳」**と五十三枚目に書いてある。

さういへば三橋敏雄の『眞神』を書き写したことを思ひ出した。ボルガで敏雄さんに話したら、「今度サインをしませう、さうすれば立派な句集、」といって頂いた。

一寸前まで六人でわさわさと暮らしてゐた。気が付くと今は妻と猫とで静かに暮らしてゐる。外猫が先日道路でぐったりしてゐると、隣人が知らせてくれた。頭を撫でてあげたが脚が立たない。わたしの顔を見あげてニャーと啼くのみ。日影から日向に移してやらうとしたら指先を噛まれてしまった。動物愛護センターに電話、わたしは病院へ。結構腫れてキーボード使用が不便になった。病院から帰ると猫はもう居なかった。この猫は警戒心が強くなかなか触らせてくれない雌猫であった。餌を手の平から食べるやうになるのにどの位掛かったらうか。好き嫌いの多かったこの猫も晩年は何でも食べた。毎朝毎晩硝子越しに姿を見かけると、みゃーみゃー啼いてゐた。噛まれた指の痛みをを覚えながら俳句雑誌の「あとがき」にふさわしくない文を綴ってゐる。

今月から作品鑑賞を篠田純子さんから秋川泉・森なほ子両氏へバトンタッチ。よろしくお願いします。

（喜孝）

二〇一七年二月号

発行日　二月十日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623

印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／松村美智子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝

会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
郵便振替　00130-6-55526（あを発行所）
乱丁・落丁お取替えします。